

# 「旧・志免炭鉱立坑櫓対策に関する決議」に対する古庄の反対討論

(志免立坑櫓の解体を求める議員提案の決議に対する古庄の反対討論)

## 【古庄の 反対討論】

先程の質疑でも分りますように、今回提出された「志免立坑櫓解体の決議案」は、公的文書であり、議員が提出する決議としては、客観的な事実欠け、あまりにも想像的であり、矛盾する決議案であることを冒頭に申しあげておきます。

さて志免町の歴史は約2万年前に人が住み始め、多くの古墳を有する農村地帯でありましたが、この志免町が飛躍的に発展したのは、明治22年、お隣の新原に海軍の採炭所が開坑し、明治39年、志免村にこの海軍採炭所の第5坑が開坑されたことに始まり、戦前は海軍、そして戦後は「日本国有鉄道志免炭業所」として我国唯一の一貫した国営の炭鉱として栄えてまいりました。

ちなみに大正10年の九州の人口は長崎市が最大で17万人、福岡市が9万人、志免村が1万1千人で、粕屋郡内第一の炭鉱町として栄えて来ました。

一方、農家とのかかわりは、先般開催したシンポジウムでも語られましたが、『当時は志免の農家の方が「石炭」を福岡に運び肥料の「人糞」と交換をしていた。これほど志免の炭鉱は石炭だけではなく農家にも愛され貢献をしていた』と語られました。

このように、わが志免町の歴史と繁栄を語る中で切っても切れないのが「石炭産業」であります。

炭鉱町から来る町のイメージについてルル語られる方がいますが、戦後、世界第2位の経済大国に復興したのは、この「石炭産業」の隆盛と、これを苦しさに耐え、働き続け、支えた多くの先人の人々がいたからこそであり、これこそ「日本人の誇り」であり、地域、そして「志免町の誇り」ではないでしょうか。

戦後の日本は全てが苦しい辛い時代で、それらを乗り越えて現在の日本の繁栄がある訳で、この事実と歴史をしっかりと後世に語り継ぐ事が「日本人の誇り」を醸成することになる訳です。

その生きた証し、大事な教材がこの「志免立坑櫓」であり、これを壊す事は「日本人そして志免町の誇りと歴史」を抹殺する事になります。

毎年、10月に開催される「志免炭業所炭鉱事故犠牲者慰霊祭」に参列される当時、働いておられた従業員の方々、そしてご遺族の方々も声を同じくして、「自分達の働き生きてきた証し、誇りである立坑櫓を是非残して欲しい」と熱く語られます。

また志免町の小学校、中学校、全てで「志免の炭鉱の歴史と立坑櫓」を学び、町の誇りとして、宝物として愛し続けています。

その一端が、今年NHK全国放送で放映されました「発見ふるさとの宝」での子供達の声です。

また番組内でコメンテーターの方々に頂いた立坑櫓への言葉「働いて家族 支えたその証し」「先人の誇りを宿す塔」この言葉が歴史他全てを物語り、志免の子供達が語る言葉の代表「立坑櫓があるけん志免やろうもん」この言葉が現代の子供達の思いなのです。

先程提出された「立坑櫓解体」の決議案はこれらの歴史なり先人たちの思い、そして未来を担う子供たちの心も、夢も、全て無視し、抹殺するものであります。

次に、立坑櫓の客観的な評価は、平成10年9月に「志免町文化財保護審議会」が表明しその保存活用を要請いたしました。

また日本における土木の最高権威機関である「日本土木学会」が、門司港駅舎や長崎の出島橋と同じく、日本に現存する最重要な炭鉱遺産としてAランクに評価し、平成14年4月には「現存する立坑櫓の中では飛び抜けて規模が大きいだけでなく、我国の鉄筋コンクリート構造学、炭鉱技術史において優れた近代化遺産として評価されたもので、文部科学省指定の重要文化財に該当する」として南里町長宛て保全的活用の要請がなされました。

これはすごい事で、志免町が残す事を決定すれば学会他はこれらの動きに進む事は当然です。

特に岡山大学大学院の馬場教授は「日本に現存する最重要な炭鉱遺産。地域の宝。もしこれを破壊したとしたら、それは地域の恥というだけでなく、世界中の笑いもの」「RC構造の寿命は100年を超える」と語っておられます。

また 今年6月18日にシーメイトで開催された「日本産業技術史学会」では、九州大学工学部を卒業され海軍

にて、この「立坑櫓」の建設を直接指示された「浜島たけし」さんの記述なり、現場監督の「岩橋惣吉」さんの当時の建設現場の写真や鉄筋の多さの写真を見ても、この「立坑櫓」のすごさと建築学上の価値、そして60年間、びどうだにしない強固さを立証し私達に示してくれており、志免町の誇りと再認識させるものです。

また数々の立坑櫓、及び立坑に対する研究と図面を、解体を表明される皆さんは見聞された事がありますか。

このように九州を始め、全国の産業考古学会や日本産業技術史学会他多くの学会やシンポジウムで全国の権威ある方々が立坑櫓の評価を語られています。

これこそが客観的な「立坑櫓」に対する評価です。

どこかに「志免の立坑櫓」を酷評したり卑下するような評価を下す学会なり権威者なり学者がいれば教えて頂きたい。

解体の決議案にはこのような客観的な評価なり事実の提示が全然示されておらず、単なる憶測での話しであり、その信憑性は皆無であります。

私は同僚の議員と平成14年2月に文化庁を訪問し「志免立坑櫓」がなぜ「近代化遺産」に登録されないのかと、その要因を伺いました。

結論は、つまり全てが「地元の意向次第」と言う事なのです。

これを裏付ける事実が平成16年3月11日の福岡県議会の吉松議員の質問に対する県教育長の答弁です。

「志免鉱業所の立坑櫓は、日本の近代化を牽引した石炭産業の代表的な遺産であり、近代産業の歴史を学ぶ遺跡として保存し後世に伝える事は、きわめて意義深いことと考えている。国はこの立坑櫓について、文化財として指定するためには、地元でさらなる歴史的、学術的調査研究を行い歴史的評価を高める必要があるとの見解を示しております。県教育委員会といたしましても、十分な調査研究が行われるとともに、まず地元が保存への意向を明確にすることが重要であると考えております」

国も県もその価値を高く評価している訳で、しかし保存には「地元の意向」が全てだと明確に示しています。

立坑解体決議案はこの見解をも否定し無視するものです。

志免町教育委員会は平成12年から14年にかけて「志免鉱業所遺跡」を調査し、今年3月31日に「志免町文化財調査報告書、第15集」として報告書を作成され、全国に公表し、大変なる評価を得ています。

産業遺跡の調査では全国のトップクラスに評価され、立坑櫓もその中心として高い評価を得ています。これも先程の国、県の見解を裏付けるものであります。

決議案には「立坑櫓」に対する評価なり利用法が全然語られていないが、「櫓」が持っている価値にはそのものの価値とそれによって醸成される価値があります。

国土交通省は「地域資源を活用した広域連携による交流人口の拡大、地域活性化と魅力ある地域づくりが肝要であり、地域の歴史や文化によっても生み出された地域の個性は、住民にとって誇りとなるだけでなく、訪れる人に新鮮な驚きを与えてくれる。全国各地で画一的な地域となっていることに反省をし、もっと地域の歴史・文化に目を向けた地域づくりが必要だ」と述べています。

先程の馬場教授は「志免立坑櫓のシンボルとしての価値は1年1億として55億円は下らない。地域の宝を簡単に壊し、何か「やすぶしん」の下らないものをつくり、将来の粗大ゴミのもとにしても子孫は尊敬してくれない」と語られています。

また北海道産業考古学会の山田会長は「産業遺産は地域の宝として確実に地域おこしに活用されている。九州は戦後エネルギー産業の改変の激動地であり、その遺産を客観的にツアーとして立体的に提供する時期に来ている。その発信地域として、九州石炭産業の最後の残照としての志免炭鉱の全遺産を産業観光する価値は大である」と述べられています。

この流れを裏付けるのが、国の「ビジットジャパン・キャンペーン」なり九州、福岡県の「九州観光推進機構」の立ち上げであり、国土交通省九州運輸局発刊の「九州遺産」の発刊であります。

昨年3月に鹿児島で開催された「第3回全国産業観光フォーラム」や今年7月には大牟田で「九州産炭地フォーラム」鹿児島で「九州近代化産業遺産シンポジウム」そして今年8月には長崎で「九州の伝承遺産シンポジウム」

ム」と、各地で九州の「産業遺産」を考えるシンポジウムが開催され、これらをネットワーク化し世界遺産登録を目指すとの表明もされ、その中でも志免立坑櫓は高い評価を得ています。

その裏付けとして今年7月、世界遺産の選考委員である「国際産業遺産保存委員会事務局長」のスチュアート・スミス氏が「志免立坑櫓」を視察され絶賛をされました。

世は常に動いています。

お隣には「九州国立博物館」がオープンし、連日盛況をきたしています。

志免町の立地条件はどうですか。これらを全て関連付けて判断すれば、「立坑櫓」がかもし出してくれる価値は判断できると思います。

解体決議は具体的な事例の提示も無く、「聞かされている」との言葉でも判断できるように単なる憶測だけで批判をしています。

世界的に有名な多摩大学の望月教授は「遺産は知産、古き知産を磨いて 地域を開く」と提言されています。

今、どの自治体も地域のブランドを求め、誇りとなる町づくりのランドマーク、シンボルを構築しようと一生懸命です。

しかし今回の決議は、誰しもが理解できる地域のランドマーク、それも「世界一の遺産」を壊せと言う決議です。これが無くなったら志免町に何が残るのですか。志免町のシンボル、誇り、ランドマークは何があるのですか。

しかし志免町だけの問題ではありません。

歴史的にも、海軍採炭所、国鉄志免鉱業所、いずれも志免町だけでなく、特にお隣の須恵町にとっては志免町以上にそのかわりは強く立坑櫓に 対する愛着と保存への 気持ちは、元従業員の方々の声や署名活動の過程でしっかりと認識いたしました。

将来の地域の町づくりにとって、この事実を無視し解体する事はできません。

町長は議会に対し一貫して「一度解体したものは元に戻らない。残せるものなら残したい」と明言し、「財政面と安全面について専門家に調査を依頼する」とした事は、志免跡地委員会も議会も容認をした訳で、その結果を踏まえ町長が決定した事に対して、客観的なデータも裏付けも無く、単なる思いとしての決議を提案することは大変遺憾な事であり、歴史に汚点を 残す事になります。

また NEDO から土地を含めた無償譲渡を受けることは「解体か保存か」の議論、つまり「町づくり」の議論を将来に向けて継続する事になる訳で、まずは志免町の物にする事が、誰が判断しても町益につながる事であり、今回の唐突な「解体論」の提示はあまりにも町の財政と将来設計を無視した無謀な提案であります。

今議会で町長は、志免町の歴史を熟知され、将来への夢を描き、その思いを「今日から歴史をつくる」と明言されました。歴史に残る言葉であります。

「柳川の川くんだり」「豊後高田市の昭和の町づくり」「日田市の豆田」「宮崎の綾町」多くの成功した町づくりには、古い概念と非建設的な流れに負けない強い意志のトップがいたからこそ実現出来ています。

志免町の歴史を育んできた先人達の声、そして未来を担い夢見る子供達の声、そして全国からの多くの声をしっかりと理解され「見守り保存」を決意された町長の英断を、議会がこのような希薄な内容の「決議文」を持って否定する事は断じて行なうべきでは在りません。

しっかりお考えを頂きたいと存じます。

町民の付託を受けた良識ある同僚議員の皆さまの英断を心から信じ、本「決議案」に反対を投じて頂きますことを強くお願い申し上げ、反対討論とします。